

第13話（8頁） ほねをくわえた犬

犬がほねをくわえて、橋をわたっていました。見ると、水にかげがあります。犬は、水のなかに見えるのは、かげではなくて、ほねをくわえた犬だと思ってしまい、そっちのほねをとろうとして、自分のほねをはなしてしまいました。むこうのほねはとれなくて、自分のほねは水のそこ。

「この寓話は『イソップ物語』にも出てくる有名な話だね。『アーズブカ』の中でイソップ物語から題材を得た話の初登場になる。」

「イソップでは、犬がくわえているのは、ほねじゃなくて肉だった。小さいころに、そう読んだ記憶だ。」

「確かに、その通りだ。手もとの『イソップ寓話集』（中務哲郎訳、岩波文庫）だと＜肉を運ぶ犬＞（114頁）と題名がついているよ。」

「どう違うか、って、二つを比べると、『アーズブカ』の方が、文章が短い。『イソップ』だと、水に映った犬は自分のよりも『もっと大きな肉』をくわえていた。水面が揺れて反射で大きく見えたのかな。『アーズブカ』では、『ほねをくわえた』別の犬と思ったとあるだけで、大きさの比較はしていない。」

「昭和女子大学の図書館では2006年に『アーズブカとイソップ』の展示をしていて、パネルの中で互いの特徴を説明している。『イソップ』はストーリー重視で文章も丁寧なのに対し、『アーズブカ』は細部を省略してもリズムカルな響きを大事にしている、だって。その具体例として、まさに、この話を取り上げていたんだ。」

「ふーん、なるほど。」

「欲張りはいけない、という話は『アーズブカ』にいくつも出てくる。それで、以前に初等教育科の学生たちがつくったアーズブカ研究グループで話し合ったことがあった。そうしたら、『農奴は分を弁え、それ以上の欲を出さないようにしないと元も子もなくしてしまう。トルストイはそう思っていたんじゃないか』という意見が出てきてびっくりした。そこまで読み込むことも可能なのか、と考えさせられたよ。」

<参考>

『イソップ物語』に関しては、原則として、ここで触れた『イソップ寓話集』（中務哲郎訳、岩波文庫）を引用しました。目にしやすい手ごろな本と思ったからで、訳者によれば、ギリシア語で残っている471話を全訳しています。日本語訳の本は数え切れないほどあるばかりか、そこで取り上げられている寓話の内容や数は微妙に違ってきます。